

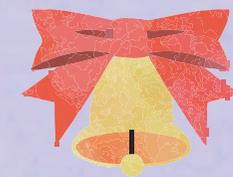
空の里だより

NPO法人地域福祉支援センター ちいさな手 第10号

- 2018年上半期 ちいさな手の出来事
- ちいさな手と私
- ちいさな手のお仲間
- ちいさな手 スタッフ紹介
- コラム「風の言の葉」
- 新得町権利擁護包括支援体制整備事業の委託を受けました

【第10号】

2018年11月22日 発行



2018年
上半期

ちいさな手の出来事

お花見



神社山でパチリッ！



2018年前半もあっという間でしたね。
4月から9月までの出来事を振り返りました。

たまた箱
農園



今年も驚き！
大収穫!!



やるぞー！



立派に咲きました！



花壇整備



たまた箱
運営推進会議



新規メンバーを迎えて
開催しました



2018
RUN伴参加



上半期の地域交流

今年の走者は
祥子&光彦&
大山でした!



助かるワン♪



キレイに
なりました♪



新得支援高校実習
& ボランティア



ちいさな手と私



利用者 寺井 ^{かつひろ}勝廣さん(69歳)
^{マリコ}萬里子さん(69歳)

今回は、ご夫婦でちいさな手とつながりのある、
寺井さんご夫妻からお話を伺いました。
お二人のこれまでや、お仕事について
お話していただきました。



新得町で生まれ育った私は、静内の工場
働いていた頃、妻の万里子と出会い、結婚。
それから今まで、42年もの日々を2人で共に
歩んできた。

結婚してから3年ほど、妻の故郷である静
内で暮らし、その後は新得へ戻ってきた。振
り返ると、生きていくために本当にさまざま
な仕事をしてきた。

新得町は国鉄の町だったから、汽車が安全
に走れるように、レールを補正する仕事をし
ていた。ほかに、割り箸工場で働いたこと
もあったし、養鶏所での仕事が一番長かった。
どの仕事も大変だったが、家族を守ってい
くために、精一杯働いた。妻も裁縫の仕事
をして、家計を支えてくれ、感謝している。

2年ほど前から、元々妻がお世話になっ
ていたちいさな手のヘルパーを利用している。
自分たちでは手が回らないことや、細かいこ
とに気がついて、やってもらえて、とても助
かっている。

これからも、ちいさな手の力を借りながら、
夫婦2人で支えあって、穏やかな暮らしを続
けていきたいと思う。



スタッフの関根さんと、笑顔で一枚。

小田島洋樹さんより

私が保健福祉課の在宅支援係となったのは、10年前のことです。その時からちいさな手の清野さん達と、関わるようになりました。以来、お互いに思いを持って、地域の福祉に取り組んできました。

地域の福祉に携わる中で、私が大切にしていることは、顔と顔を合わせることです。できる限り、町民のもとへ出向いて、コミュニケーションをとるようにしています。

ちいさな手の皆さんもフットワークが良くて、そういう所でお互いの波長の良さを感じていますね。

会議や行事でちいさな手を訪れる機会も多いですが、いつも和気あいあいとした雰囲気、地域にこうした事業者があることが、本当に心強いです。今のちいさな手が、このままあり続けてほしいと思いますし、行政である自分たちも、地域の福祉のためにできる限りのことをしていきたいと思っています。



保健福祉センター「なごみ」



センターの中には、町民の健康づくりのためのトレーニング機器が。リフレッシュセンターには専門のスタッフがいて、機器の使い方などのサポートをしてくれるほか、エアロビズムなどの体験プログラムも随時開催されています。

新得町の「地域包括センター」は、ちいさな手とつながりの深い行政機関です。行政と民間、それぞれ立場は異なりますが、地域の福祉を支えるために、協力しながら進んできました。皆さん気さくで明るく、小さなことでも話しやすいんです。代表してお話を伺った小田島さん（写真・後ろ中央）とは、今年で10年目のお付き合い。新得町出身者として、ここで暮らす人のことを良く知る小田島さんの存在は、新得の福祉においても大切な存在です。



「一人でも多くの人が、自分らしく暮らしていけるように」。光彦さんが祥子さんと共に、ちいさな手を設立したときから、その思いは変わらない。

利用者の一人ひとりに、住み慣れた家があり、かけがえのない毎日がある。できることなら誰だって、「いつもの場所で、いつもの暮らし」がしたいはず。

「その力になれる、自分の事業所を作りたい」。福祉を学んでいた学生時代から、思い続けてきた夢が形になったのは、2000年のこと。独立して社会福祉の事業を始める人自体が、ほとんどいない頃だった。

それでも光彦さんは、これまでの日々を振り返って「楽しく駆け抜けてきて、あつという間だった」と明るく笑う。

利用者が自分らしく暮らせている姿、たくさんの人々との出会い、看板犬の空里と絵夢、スタッフや家族の存在が、光彦さんのパワーになってきたことだろう。

これからも光彦さんは、祥子さんをはじめ、ちいさな手に関わるたくさんの人たちと、変わらない思いを持ち続けながら、前に向かって進んでいく。

ちいさな手

スタッフ紹介



理事
清野 光彦 さん
（せいのみつひこ）
新得町出身



2015年、赤い耕運機を購入。赤いつなぎを着て、記念に一枚。



お誕生日に祥子さんからプレゼントされたウクレレ。11月の祥子さんのお誕生日にバースデーソングを歌うために練習中。



35年間、支えあってきた2人。いつも笑顔が素敵です。

ガゼ 風の言葉の世界^{ことば}

2 018年冬、大泉洋さんが主演する映画「こんな夜更けにバナナかよ 愛しき実話」が公開されるらしい。

勿論、大泉さんが主演ということでの興味もあるが、それ以上に、ひよつとしたら私がこの世界で仕事を続けていられる原点を思い出させてくれるような「日常」が描かれているのではという期待も膨らんでいる。

今回は、そんな「日常」普通の暮らし」にまつわる私の原点について書いてみたい。

タイトルシーンは、「主人公大泉さん扮する鹿野さん（筋ジストロフィー症患者）が夜中にボランテアさんを起こして「バナナが食べたい」といい「そんなことで起こすなよ!!」と一瞬腹立たしく思えるが…」という何気ない日常の様子なのではないかと想像できる。筋ジストロフィー症という病気は、全身の筋肉が徐々に衰えていく難病で、24時間365日他者の介助がなければ生活できない。寝返りさえ自力では行えないので他者の手を借りなければならない。

仙台での学生時代（約40年前）、筋ジストロフィー症の仲間の自立運動の末席に加えていただいていた私は、何度も夜中に寝返りをうつ手伝いをさせていたのだが、なかなか起きない奴だったらしい。寝入っているとところに「セーノ君」「セーノ君」と遠くから小さな声で呼ば

れる感覚がいまだに忘れられない。しまいにには、私を起こすのを諦め、反対側に寝ている友人の名前に変わっていたりすることもあった。運よく起きた場合、まず、お尻の位置をずらし、頭・手・足の位置を本人の指示通りにきめてお互いに再び眠りに入る。普通2時間おきくらいにこの介助があるので、一晩一緒に寝ると3〜4回お呼びがかかることになる。当然に眠たい中での介助なので、この為に起こされたと思いきや「バナナ食いたい」と言われたら「エー」と返したくなる心境も本当に良くわかる。

当時、多くの仲間が病院にいた。病院では、寝返りなども定時の作業として行われていた。

自立を目指す彼らには、病院の空間が日常なのだが、勢い、外の世界に彼らにとっての非日常の世界に憧れる。当時、仲間達と「日常」と「非日常」の議論をしたが、理解力が乏しかった私にはかなり難しかった。ただ、病院や施設は、「管理」された空間であるという認識は、培われたように思う。

「管理」された空間では、さすがに真夜中に「バナナが食いたい!!」とは言えない。

こんなたわいもない会話が「日常」なのだと思える体験は、人の価値観を180度変えるものになることは、今ならとてもよくわかる。

「普通に暮らす」とは、どういうことか。40年前の自分に会えるかもしれないと思うと映画の公開が本当に待ち遠しい。

新得町権利擁護包括支援体制 整備事業の委託を受けました

認知症や障害を抱える人々の権利や財産を、後見人を立てることで守る「成年後見制度」。この制度の利用を促進するために、新得町が始めたのが今回の事業です。事業のスタートにあたり、新得町役場の小田島さん(5pで紹介)曰く、「現場を知っている清野さんしか、考えられない」ということで、ちいさな手の理事、清野光彦さんがコーディネーターに就任。光彦さんが、「きちんとこの事業を前に進めて、一人ひとりの権利が護られる社会を作っていきたい！」と意気込む、新たな挑戦が始まりました。



スタッフ皆で取り組んでいます

～来年3月までに、あと2回の学習会及び協議会開催を予定しています～

第1回学習会「成年後見制度を俯瞰する」



第1回体制整備協議会



第2回学習会「成年後見制度はどんな時に使えますか」。



寸劇でわかりやすく！



寸劇終了後に皆で。大成功でした!!



特定非営利活動(NPO)法人
地域福祉支援センター

「ちいさな手」



〒081-0038 北海道上川郡新得町西3線50番地15
T E L 0156-69-5560 F A X 0156-69-5561
相談専用 0156-69-5570

□E-mail nposcswc@chive.ocn.ne.jp □HP <http://npochiisanate.jimdo.com/>